

第3章 現天守閣の記録の保存と記憶の継承

(1) 現天守閣の概要

① 概要

	大天守		小天守		エレベーター棟
建設年月	昭和34年(1959)10月		昭和34年(1959)10月		平成9年(1997)
基礎	ケーソン		ケーソン		直接基礎
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造		鉄骨鉄筋コンクリート造		鉄骨造
階数	地下1階地上7階		地下1階地上3階		2階
延床面積	5,422.20㎡		1,345.00㎡		35.77㎡
復元	宝暦の大改修後の外観復元				—
主な用途	地下1階	通路、機械室	地下1階	通路、機械室	エレベーター 階段
	1~5階	博物館展示室	1階	障壁画修理室	
	6階	機械室	2~3階	収蔵庫	
	7階	展望フロア			

② 再建までの経緯

昭和20年(1945)5月に空襲によって焼失した名古屋城天守は、昭和34年(1959)に鉄骨鉄筋コンクリート造で再建された。

再建に対する考え方については、戦後すぐの昭和20年(1945)9月には早くも城戸久が、戦後の状況を踏まえて鉄筋造で再建する考えを示している。一方で、やや時期は下るが、石川栄耀の、コンクリート造での再建に否定的な意見もあった。これに対し、実際に再建事業を進める名古屋市の考え方としては、昭和28年(1953)に作成された「名古屋城の再建について」という報告において、「御殿は鉄筋コンクリート造の近代的な建築にして博物館か美術館とするがよいが、天守閣は昔のままのものを是非再現したいものである」との考えが示されている。最終的に名古屋市は、鉄骨鉄筋コンクリート造により、外観は復元、内部は観光の側面も持つ博物館として整備することとしたが、実際に再建計画がまとまるまで、どのように再建するかの方針に関しては、多様なものがあつたことがうかがえる。

市民の間でも、天守を実際に再建しようという声は比較的早い段階から見られた。

昭和22年(1947)には、名古屋商工会議所・名古屋観光協会が、名古屋城を取り去ることは市民から文化を取り去ることであると趣旨から「名古屋城復旧に関する陳情書」を提出するなど、早い段階から再建の声が上がっていた。

また、昭和23年(1948)8月5日の中部日本新聞では、名古屋城の復興についての世論調査の結果が示されており、再建が必要だとの意見が73.6%の多数を占めている。建築様式については、「昔のままの木造建築」が44.7%、「近代式建築(鉄筋)」が37.5%と木造が上回っている。一方で、用途は、博物館、美術館という意見が55.6%と過半数を占めた。

昭和24年(1949)になると「名城再建後援会」が組織されたが、当時の塚本三市長が、「ぜひ復旧したい。しかし今日まだその時期ではない。市民のわきあがる声もう少し大きくなる日を待ちたい」(田淵寿郎『或る土木技師の半自叙伝』中部経済連合会1962)という方針を示していたことから、具体的な計画には進まなかった。

更に市民の中にも、住宅不足の解消や教育施設、交通網の整備など都市基盤の整備を優先すべきであり、天守閣再建は時期尚早との声も大きかった(「名古屋城再建に異議ありや」名古屋タイムズS26.1.5など)。

昭和25年(1950)に文化財保護法施行、昭和26年には、文化財保護審議会により天守台石垣などの修復に対して国庫補助金が交付されることになり、これをきっかけに、当時の塚本市長も天守の再建に向け決意を固めたとの記事が残されている(中日本新聞 S26.3.9)が、この時点では計画は具体化にむけて進展しなかった。

昭和28年(1953)頃から、いっこく会の活躍などがあり、市民の間にも観光資源としての期待が高ま

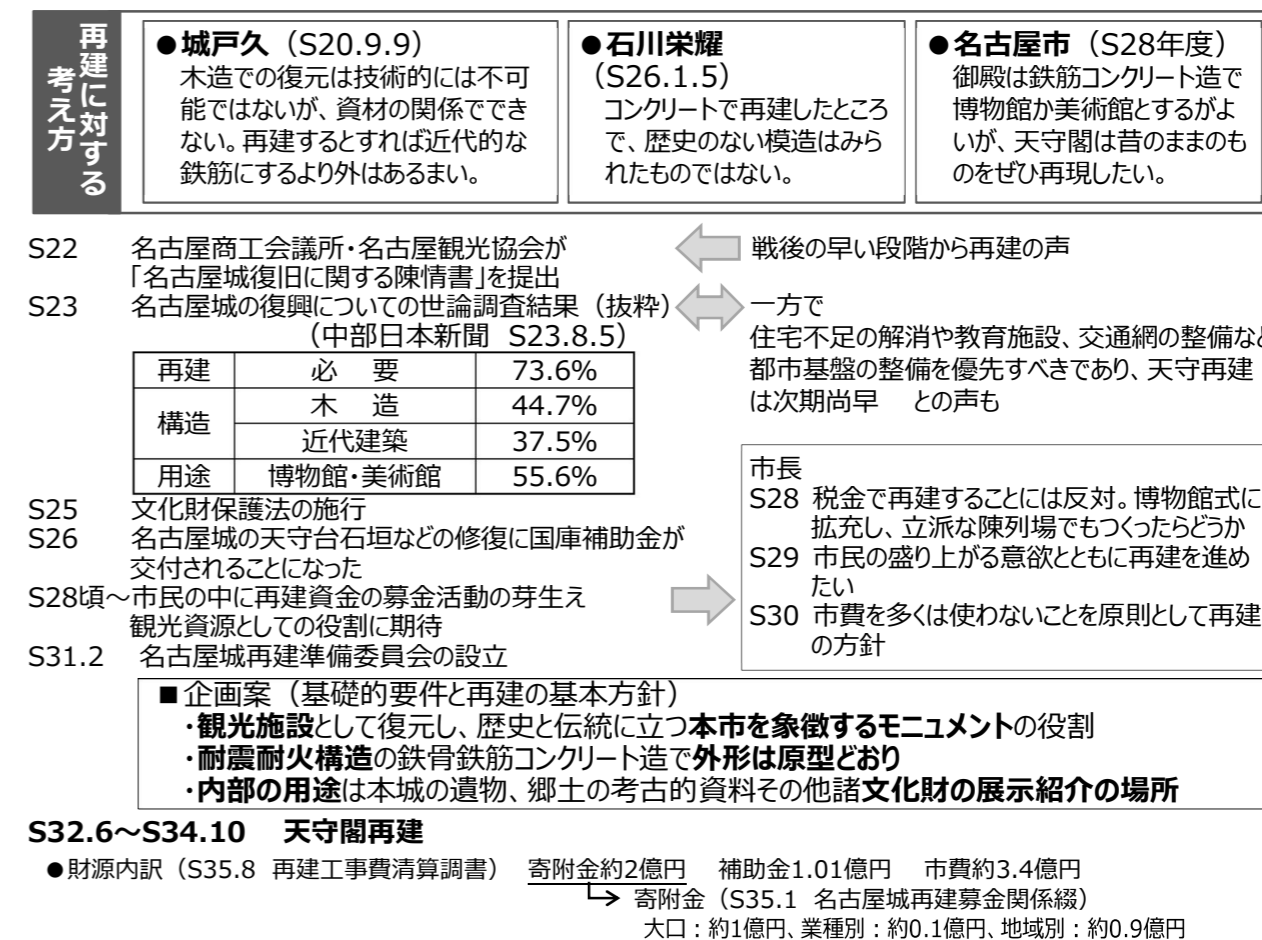
った結果、翌年頃からは市政も再建へと傾き、昭和31年(1956)2月の名古屋城再建準備委員会設置へとつながっていった。この当時の市長、小林橋川は、昭和28年(1953)には、税金で再建することには反対。博物館式に拡充し、立派な陳列館でもつくったらどうか、と述べているが、翌年には、市民の盛り上がる意欲とともに再建を進めたい、との発言が報道され、更に30年(1955)の報道では、市費を多くは使わないことを原則として再建の方針と報じられており、徐々に機が熟していった様子をうかがうことができる。

具体的な計画については、名古屋城再建準備委員会で示された企画案でも「観光施設」として復元とされている通り、歴史的建造物の再現として「歴史と伝統」を伝えること以上に、「国際的観光資源」(昭和31年(1956)第24回国会衆議院文教委員会における文化財保護委員会高橋誠一郎会長の発言)、「中部日本全体の大きな観光資源またはその拠点」(名古屋市助役の杉戸清による『広報なごや』第107号1957)としての役割が期待されていた。

再建準備委員会設置前後から、鉄骨鉄筋コンクリート造で再建された大阪城の調査や名古屋城内での地盤調査など、各種の調査も進められ、昭和32年(1957)6月に再建工事が開始し、昭和34年(1959)10月に現天守閣が完成した。

なお、再建の資金については、塚本・小林両市長の、再建はあくまで市民の盛り上がる力によってなされるべきで、税金をもって充てるべきではないという考えに従い、桑原知事を会長とする「名城再建後援会」などを中心として企業や県民から寄付を募ることとし、実際、再建費用約6億円のうち、予定の倍にあたる約2億円(大口約1億円、業種別0.1億円、愛知県内の地域別0.9億円)が経済界を中心とした民間寄付によって賄われた。

【現天守閣の再建までの経緯】



**(2) 現天守閣の評価**

我が国では、戦後復興の過程において、耐火建築として天守（天守閣）を再建することが流行した。これらは大きく、①明治時代に解体あるいは焼失した天守の外観を模したものの、②第二次世界大戦までは残っていたが、戦災や戦後の火災で失われた天守を昭和 30～40 年代に外観を模して復興したもの、③戦前・戦後に建築されたいわゆる模擬天守（文化庁文化財第二課・文化庁文化資源活用課「史跡等における歴史的建造物の復元のあり方に関するワーキンググループについて」より）などに分けられる。現在、国内 13 カ所において、近世城郭の史跡内に再建された鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造の天守（天守閣）が存在しており、名古屋城の現天守閣もこの中に含まれる。

これらの再建天守（天守閣）は、各地における戦後復興の象徴というだけでなく、往時の外観を模して再現されたという点において、史跡等の本質的価値の理解に一定の役割を果たしてきた。さらに、歴史博物館や観光施設などの新たな機能や、景観の構成要素、地域のシンボルとしての役割を担ってきたことが指摘されている。

**■ 現天守閣の果たしてきた役割**

名古屋城の現天守閣は、再建後 60 年にわたり、次のような役割を果たしてきたと考えられる。

- ・名古屋城天守は、名古屋のシンボルとして認識されており、戦後に再建された現天守閣は特に、鉄骨鉄筋コンクリート造で内部を博物館とする戦後復興の象徴として再建され、その役割を果たしてきた。
- ・現天守閣は、昭和実測図やガラス乾板写真等の豊富な史資料に基づき、外観はほぼ正確に復元された。これにより、近世城郭の姿を現代に伝えるものとして、特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進に寄与してきた
- ・天守台石垣に直接荷重がかからない構造としつつ、高い精度で外観復元するなど、当時の建築技術水準の高さを示すとともに、戦後の名古屋の都市景観を構成する役割を担ってきた
- ・現天守閣は、日本丸御殿障壁画等の重要文化財の展示に加え、貴重な資料の収集・保管等を行ってきた
- ・市民の活動や、名古屋城博及びデザイン博などの集客イベントのほか、周辺市街地からの眺望や景観、金シャチに関する話題など様々な場面で名古屋城は引き合いに出されるなど、関心の高い事柄であった。
- ・「尾張名古屋は城でもつ」とうたわれる名古屋城は、名古屋近隣の東海地区において、必須の観光地となっている。現天守閣の外観復元されたことにより、名古屋市民はもとより、近隣の県民、国内国外の方にも、名古屋を代表する観光資源として認識されてきた

以上の整理に従い、現天守閣は次のように評価される。

現天守閣は、精度の高い外観復元が行われ、その姿を正確に示している点で近世城郭の理解に寄与してきた。しかし、その主たる意義は、歴史的建造物の復元という点よりは、鉄骨鉄筋コンクリート造という構造の面でも、博物館としての用途の面でも、新しい時代に即した天守閣を再建した戦後という一時代を象徴する建造物、という点にある。

また、戦災によって失われた名古屋のシンボルを、正確に外観復元したことにより、市民の愛着や誇りを醸成するとともに、この地域の観光振興に寄与し、高度成長していく街の姿を見守りながら、名古屋という都市のイメージを対外的に発信し続けてきたことの意義は大きい。

**(3) 現天守閣の記録の保存と記憶の継承**

現天守閣は、外観復元された鉄骨鉄筋コンクリート造の建造物であり、戦後復興の象徴でもあった。現天守閣の記録を適切に保存し、果たしてきた役割を後世に継承することで、400 年を超え存在してきた名古屋城の歴史的意義を高める要素となりえる。

木造復元に際し、解体される現天守閣の記録を作成し報告書として残していくと共に、その記録を活用し、広く発信していく事で、現天守閣を市民の記憶に留め、現天守閣の記録・記憶を後世につないでいく。

**① 記録の保存****■ 図面・写真**

- ・建造物としての現天守閣を、図面・写真等で記録に残す。
- ・解体前及び解体時において、図面の整備（設計時、竣工時、現状）、仕上材の記録、建築部材の採取・保管、三次元点群データの記録、写真と動画の記録、ストリートビューによるVRといった手法を用い、現天守閣の特徴を的確に記録化する。

**■ 「もの」**

- ・部材の断面構成・仕様がわかるように、屋根・柱・梁・壁等の構造体や、内外装材、仕上げ材等の一部を採取、保管する。
- ・採取、保管する部材の候補は以下の通り。
  - 外装材：銅瓦、瓦、破風鋳金具、大天守・小天守の門扉
  - 内装材：鋳金具、階段手摺、階段周り装飾板、最上階漆塗り格天井・柱ヒノキ板
  - 銘板等：小屋裏の寄付銘板、定礎、建築概要銘板、展示案内板、展示配置図
  - その他：伝声管

**■ 市民の記録**

- ・新聞や雑誌などの現天守閣に関する記事等を残す。

**② 記憶の継承****■ 記録の活用**

- ・図面・写真、「もの」、市民の記録は、西之丸に新設した「西の丸御蔵城宝館」及び名古屋城に隣接して整備を検討している博物館施設において保管するとともに、デジタルアーカイブ化を行い、保存し公開する。
- ・理解しやすく実感を持って現天守閣の記録に触れられるよう、VR等のコンテンツを作成する。

**■ 市民アーカイブ**

- ・名古屋城にまつわる写真、映像、エピソードなどを市民から収集し、都市の発展や市民生活とともにあった名古屋城への想いを可視化する。
- ・新聞や雑誌などの記事を収集し、展示などを通じて、多くの関心を集めてきた名古屋城の歩みを実感できる機会をつくる。

**■ 「もの」による記憶の継承**

- ・現天守閣の解体時に取り外した部材などを活用し、思い出をかたちに残すことを通じて、現天守閣に込められた人々の想いや記憶を継承していく。